

福県医発第257号(地)

平成16年 4月30日



各 医 師 会 長 殿

福 岡 県 医 師 会
会長 竹 嶋 康 弘



先天性風しん症候群の発生防止について

時下 貴職益々御清栄のこととお慶び申し上げます。

さて、風しん流行による先天性風しん症候群発生の懸念については、平成16年4月12日付(福県医発第83号)をもってお知らせいたしておりますが、記者発表にもありましたように、今年になって、一部の地域(鹿児島県、群馬県、大分県、宮城県、埼玉県)において、患者が数多く発生している状況にあり、過去5年間には年間0~1例の発生件数であった先天性風しん症候群の患児が今年は既に2例報告されていること等から、厚生労働省健康局結核感染症課長より、各都道府県衛生主管部(局)長に対し、別添のとおり通知がなされた旨、日本医師会感染症危機管理対策室より連絡がありました。

風しん予防接種の重要性の周知につきましては、既に平成15年12月12日付(福県医発第1635号)をもってお送りしておりますが、本通知は、これから妊娠する予定のある女性であって風しん罹患歴または風しんワクチン接種歴のないものは、予防接種を受けることにより先天性風しん症候群の発生を防止できることから、今年の風しん流行状況等を踏まえ、改めて、適切な注意喚起及び情報提供等を求めるものであります。

つきましては、貴会におかれましても本件につきましてご了解いただきますとともに、貴会管下関係医療機関等への周知、協力方よろしくご高配のほどお願い申し上げます。

小郡三井医師会より

担当理事 友清 明





(地Ⅲ 1 1)

平成16年4月21日

都道府県医師会

感染症危機管理担当理事 殿

日本医師会感染症危機管理対策室長

雪 下 國 雄

先天性風しん症候群の発生防止について

時下益々ご清栄のこととお慶び申し上げます。

さて、風しん流行による先天性風しん症候群発生の懸念についての厚生労働省の記者発表については、平成16年4月9日付（地Ⅲ 1 F）をもってお送りしました。

記者発表にもありましたように、今年になって、一部の地域（鹿児島県、群馬県、大分県、宮城県、埼玉県）において、患者が数多く発生している状況にあり、過去5年間には年間0～1例の発生件数であった先天性風しん症候群の患児が今年は既に2例報告されていること等から、厚生労働省健康局結核感染症課長より、各都道府県衛生主管部（局）長に対し、先天性風しん症候群の発生防止について通知がなされました。

風しん予防接種の重要性の周知につきましては、既に平成15年12月1日付（地Ⅲ 2 0 9）をもって貴会宛にお送りしておりますが、本通知は、これから妊娠する予定のある女性であって風しん罹患歴または風しんワクチン接種歴のないものは、予防接種を受けることにより先天性風しん症候群の発生を防止できることから、今年の風しんの流行状況等を踏まえ、改めて、適切な注意喚起及び情報提供等を求めるものであります。

つきましては、本通知をお送りいたしますので、貴会におかれましても本件についてご了知いただくとともに、貴会管下郡市区医師会等にご周知いただき、先天性風しん症候群の発生防止についてご協力いただきますようお願い申し上げます。



健感発第 0409001 号

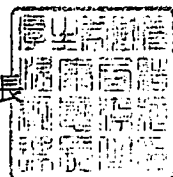
平成 16 年 4 月 9 日

社団法人 日本医師会

感染症危機管理対策室長

雪 下 國 雄 殿

厚生労働省健康局結核感染症課長



先天性風しん症候群の発生防止について

予防接種の推進につきましては、平素より多大な御支援・御協力を賜り、厚く御礼申し上げます。

感染症発生動向調査において、今年になって一部の地域（鹿児島県、群馬県、大分県、宮城県、埼玉県）において患者が数多く発生している状況にあり、過去5年間には年間0～1例の発生件数であった先天性風しん症候群の患児が、今年は3月7日の時点ですでに2件報告されているところです。また、産婦人科医からは妊娠中の風しん罹患事例の相談が寄せられており、先天性風しん症候群患者の発生が懸念されています。

これから妊娠する予定のある女性であって風しん罹患歴又は風しんワクチン接種歴のないものは、予防接種を受けることにより先天性風しん症候群の発生を防止することができることから、今年の風しんの流行状況等を踏まえ、改めて、適切な注意喚起及び情報提供等に当たられるよう、別添（写）のとおり、都道府県に対し協力方通知したところであります。

つきましては、貴職におかれましても当該の周知に関する趣旨をご理解いただくとともに、各都道府県・郡市区医師会への協力要請等、特段のご配慮をお願いいたします。



健感発第0409001号
平成16年4月9日

各都道府県衛生主管部（局）長 殿

厚生労働省健康局結核感染症課長

先天性風しん症候群の発生防止について

感染症発生動向調査において、今年になって一部の地域（鹿児島県、群馬県、大分県、宮城県、埼玉県）において患者が数多く発生している状況にある。過去5年間には年間0～1例の発生件数であった先天性風しん症候群の患児が、今年は3月7日の時点ですでに2件報告されている。また、日本産婦人科医会及び国立感染症研究所等には、産婦人科医から妊娠中の風しん罹患事例の相談が寄せられており、先天性風しん症候群患者の発生が懸念されている。

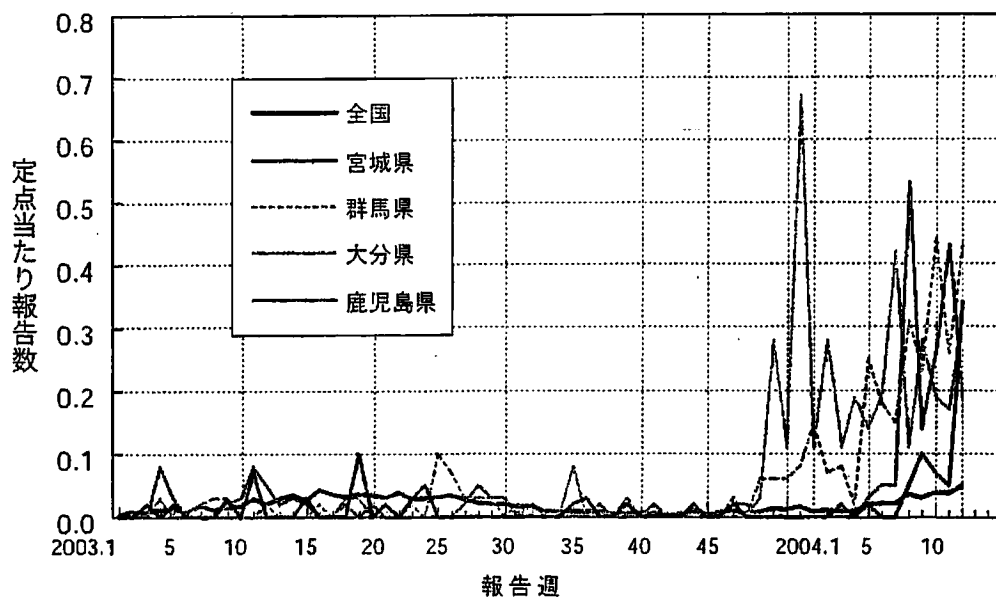
これから妊娠する予定のある女性であって風しん罹患歴又は風しんワクチン接種歴のないものは、予防接種を受けることにより先天性風しん症候群の発生を防止することができることから、既に「風しん予防接種の重要性の周知について」（平成15年11月18日付け健感発第1118001号厚生労働省健康局結核感染症課長通知）により予防接種の重要性の周知を図ってきたところであるが、今年の風しんの流行状況等を踏まえ、改めて、適切な注意喚起及び情報提供等に当たられるようご指導方お願いする。

◆風しん

2003年9月まで風しん予防接種の経過措置のキャンペーンなども行われており、ここ数年、小児科定点から報告される全国の風しん患者数は、以前よりかなり少なく推移している。しかしながら、本年の定点当たり報告数を都道府県別にみると、鹿児島県、群馬県、大分県など依然として報告数の多い都道府県もあり、第12週では宮城県でも報告が増加してきている(図)。患者の年齢群を比較してみると、本年は昨年と比べて、学童期や20歳以上の割合が多くなっている。これらの報告は小児科定点からの報告であるので、成人の風しんがより多い可能性もあり、予断を許さない。

風しんはワクチンで予防できる疾患であり、経過措置終了後の現在も、定期接種の対象者だけでなく、当時の経過措置の対象年齢層を中心に、免疫のない人達への任意接種の普及啓発が大切である。また、今年に入ってこれまでに2例の報告があった「先天性風しん症候群」の予防のためには、小児科ばかりでなく、特に妊婦や妊娠年齢の女性の管理を行う産科や婦人科においても、地域での風しんの流行状況などに細心の注意を払っていく必要がある。

図. 風しんの週別報告数 (2003年第1週～2004年第12週)



○風しんとは

風しんウイルスに感染してから14～21日の潜伏期間の後、発熱とともに全身に淡い発疹が出現する。通常3日程度で消失し、麻しん（はしか）のように発疹のあとが長く残ることはない。一般に三日ばしかとも呼ばれている。発熱は麻しんのよう高熱が続くことは少なく微熱程度で終わることも多くある。またその他の症状としては耳の後ろや頸部あるいは後頭下部のリンパ節が腫れることも特徴である。通常は数日で治癒するが、稀には、血小板減少性紫斑病や脳炎などの重篤な合併症を併発することがある。また、感染しても無症状のもの（不顕性感染者）が約15%存在するといわれており、発熱、発疹、リンパ節腫脹がすべてそろわない場合もある。

上気道粘膜より排泄されるウイルスが飛沫を介して伝播されるが、その感染力は麻しん、水痘よりは弱い。ウイルスの排泄期間は発疹出現の前後約1週間とされているが、解熱すると排泄されるウイルス量は激減し、急速に感染力は消失する。

かつてはほぼ5年ごとの周期で、風しんの全国的流行が発生していたが、平成6年以降は大流行はなく、局地流行や小流行に留まっている。

○先天性風しん症候群（congenital rubella syndrome: CRS）とは

妊娠初期の女性が風しんに罹患すると、風しんウイルスが胎盤を介して胎児に感染し、出生児が先天性風しん症候群を発生することがある。

妊娠中の感染時期により重症度、症状が異なるが、妊娠2カ月以内の女性が風しんにかかると、出生児は白内障、先天性の心臓病、難聴の2つ以上を持って生まれてくることが多い。妊娠3～5カ月に感染した場合でも難聴が多くみられる。その他、子宮内での発育が遅い、網膜の病気、緑内障、小頭症、髄膜炎、精神運動発達に遅れがある、肝臓や脾臓が腫れる、血小板減少性紫斑病などの症状が出生児に認められる場合がある。

先天性風しん症候群に対するウイルス特異的な治療法はなく、個人防衛として女性は妊娠する前にワクチンによって風しんに対する免疫を獲得すること、社会防衛としては風しんワクチンの接種率を上げることによって風しんの流行そのものを抑制し、妊婦が風しんウイルスに曝露されないようにすることが重要である。

日本では、昭和40年に沖縄で400人以上の先天性風しん症候群の児が出生した。また、昭和52年から54年には全国的な風しん大流行があり、先天性風しん症候群患児の出産を恐れて、多くの人々が人工妊娠中絶を行った。最近では、平成11年の報告患者数は0名、平成12年から15年までは毎年1名の患児が報告されている。